大平正芳回想録の刊行を終えて

刊行会代表世話人　伊東正義
森永真一郎

故大平総理を偲ぶ方々の御協力によって回想録全三巻が完結したのでありますが、編集に携ったものとしては大役を果たしてホッとすると同時に、まず念頭に浮ぶのはこの回想録を手にしたら恐らく両手で顔を覆って照れ羞じらいの仕草をする故大平総理の温顔でした。

この回想録の完成は、編集に当って御多忙のところを時間を割き、喜んで追悼文を寄稿していただいた多数の方々、取材に協力していただいた方々、執筆者、そして編集委員の方々の心温まる御協力の賜物であり、皆様に心から御礼を申上げる次第であります。

この回想録は、故大平総理の姿、その言動をそのままに再現することを期して、事実を踏まえ、できるだけ正確に、客観的に記述することを企図したのでありますが、三回忌に間にあわせるための時間の制約もあり、意を尽せぬ個所、或はもっと附加すべき点など多々あるかと存じます。故大平総理を知る人には不満足と思われることもあるやもしれず、また内容によっては快く思われないこともあるやもしれませんが、一切の責任は、刊行会代表世話人の私どもにありますので、御寛恕の程を御願い申上げます。

この回想録は、故大平総理が生前よく口にしていた〝自分のような農家生れの者でも国政を担当できるようになれることは、日本の民主主義の有難いところだ〟ということを国民の皆様に知ってもらうことであり、その少

年時代、キリスト教に入信し真摯な宗教活動を行った学生時代、社会人として大蔵省に入省し、ついで池田総理という良き指導者によって政界入りを果たし、総理として国政を担当、現職総理として斃れるまでの事蹟と真摯な一生涯を追って、その再現に努めたのであります。

特に政界では、池田総理という名伯楽によって指導され恵まれた環境にありましたが、池田総理逝きあとは、苦難に満ちた途が続き、正に〝重い荷を背負って遠い道を行く〟感がありました。田中政権から三木政権、三木政権から福田政権への移行過程は苦汁に満ちた選択をせまられ、激動期の政治史そのものでありました。

また四人の候補者で争われた総裁予備選挙は日本の政治史上始めての試みであり、特筆大書さるべき画期的な出来事でありました。次いで所謂四十日抗争の結果が、故大平総理と福田前総理の二人が総理候補者として衆議院本会議で輪贏を争う、という日本の議会史上前代未聞の異常な事態となり、その延長線上で不信任決議案可決という事態をみたのであります。

こうした激動の戦後政治史の舞台で一人の主役故大平総理が如何なる役割を演じたかを回想録に正確に残し、後世の史家の批判に供することは、われわれの任務と考えたのであります。

故大平総理の死は、自己の健康を省みる暇もなく東奔西走、総理総裁の激務にたえられたことにあることは勿論でありますが、政局の不安定による心労が大きな原因であったことは、疑いをいれぬところであります。

故大平総理逝いて二年の歳月が流れました。毎月十二日（十二日が逝去の日です）には瀬田の私邸に故大平総理の遺徳を敬慕する友人、マスコミ関係者、かつての秘書官達が多数集まり、志げ子未亡人を囲んで団欒が催されています。

人間は〝棺を蓋いて事定る〟といわれます。故大平総理の政治家としての評価は後世の史家に委ねるしかありませんが、国の内外を問わず時を経るにつれてその評価が高まっていることは事実であります。外

国持にアメリカ、中国等では今もって故大平総理に対する信頼感が強く、また昨年はパナマ国のロヨ大統領の好意により首都パナマに〝大平通り〟が命名され、その胸像が首都の公園に設置されましたし、メキシコ国においても、政府の好意によりその首都に〝大平公園〟が設けられ、その遺徳が偲ばれております。

この回想録が信義を重んじ、友情に厚く、思いやりのある誠実な政治家、信念に満ち、如何なる問題にも真摯に対応し苦難に耐え、政治理想を求めて止まなかった政治家、現職総理としてその職に斃れた政治家、故大平総理を偲ぶよすがとなり、後世の人々の何か御役に立てれば望外の喜びであります。

最後に重ねて回想録の刊行に御協力いただきました皆様に心から御礼を申上げますと共に、故大平総理の天上の霊の御冥福を祈ります。

昭和五十七年三月十二日